

ヤドヴィガ・ロドヴィッチ博士と アマレヤ劇団&メノコモシモシのコラボ



2022年11月に札幌でヤドヴィガ・ロドヴィッチ博士とアマレヤ劇団&メノコモシモシのコラボによる二つのイベントが開催されました——23日に札幌文化芸術劇場 hitaru 3F クリエイティブスタジオにおいて《第102回例会》2022ポーランドとアイヌ女性の国際アート・プロジェクト「女は語る Mówi ONNA」、28日には2会場で《第103回例会》「ポーランドのロマン主義とは何か～ポーランド・アイヌ『祖霊祭』夜明け前/シンヌラッパ・ケンネニサツ」と題する複合イベントです。聴衆は、第102回例会が約80人、第103回は第一部40人、第二部60人、両方に参加した方20人という盛況でした。
(安藤厚、写真 尾形芳秀)

《第 102 回例会》2022 ポーランドとアイヌ女性の国際アート・プロジェクト

新作パフォーマンス「女は語る Mówi ONNA」

by アマレヤ劇団&メノコモシモシ (アイヌ女性会議)



《第 103 回例会》講演・朗読 & 劇的朗読

ポーランドのロマン主義とは何か ～ポーランド・アイヌ

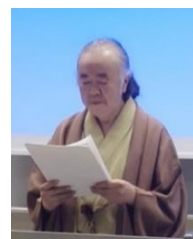
『祖霊祭』夜明け前/シンヌラッパ・ケンネニサツ



ポーランドロマン派の国民詩人アダム・ミツキエヴィチの詩劇『祖霊祭』をベースに、19世紀末から20世紀初頭の樺太・北海道におけるプロニスワフ・ピウスツキとアイヌの交流に思いを馳せつつ、ロドヴィッチ氏がオリジナルな脚本を仕上げました。1902年にピウスツキが記録した祖先への祈りの言葉も会場に響きます…

《第一部》(かでの2・7)

- ◆お話「ポーランド・アイヌ『祖霊祭』夜明け前/シンヌラッパ・ケンネニサツについて」
ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ(能の研究者、元駐日ポーランド大使)
- ◆講演: 関口時正(東京外国語大学名誉教授)「ポーランドのロマン主義」
=次頁の当日配布資料を参照=
- ◆朗読『祖霊祭』第2部(アダム・ミツキエヴィチ作・関口時正訳)
林家とんでん平=右上写真=(一人9役)コロス、祭司、老人、天使、亡霊(声)、夜の鳥たちのコロス、大鴉(おおがらす)、木菟(みみづく)、娘



《第二部》(シアターZOO)

♪劇的朗読「ポーランド・アイヌ『祖霊祭』夜明け前/シンヌラッパ・ケンネニサツ」

◇作・芸術監督: ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ

◇翻訳: 日本語 関口時正 / アイヌ語 多原良子

◇出演: メノコモシモシ(加賀谷京子、多原良子、榎木貴美子、河波まさ子)

アマレヤ劇団(カタジナ・パストウシヤク、アレクサンドラ・シリヴィンスカ、ナタリア・ヒリンスカ)=右下写真=

◇音楽作曲: アンナ・イグナトヴィチ=グリンスカ、ヨアンナ・マクラキエヴィチ

◇プロニスワフ・ピウスツキの声: マレク・ブガイスキ



(写真 安藤厚)

ポーランドのロマン主義

～ミツキエーヴィチ作『祖霊祭』の役割と意義

関口 時正



関口時正教授の貴重な講演が実現 (写真 尾形秀秀)

ポーランドの国会下院は2022年を「ポーランド・ロマン主義200年」を祝う記念の年に制定した。詩人アダム・ミツキエーヴィチ Adam Mickiewicz (1798-1855)は、200年前の1822年に『詩集第一巻』いわゆる『バラードとロマンス』をヴィリニウス(現在リトアニア首都)で出版した。

『バラードとロマンス』と『祖霊祭』

日本語訳は2014年未知谷(みちたに)刊。集中最も長いバラード「百合の花」は、354の七音節詩行が連続する切迫したリズムと、感傷を排し、被支配階層の視点から語る、文字通り革命的な傑作。『バラードとロマンス』の世界はそのすべてが、ベラルーシの三つの町ノヴォグルデク、ミール、バラノヴィーチェを結んだ各辺50kmにも満たない三角形の内側におさまる。

翌1823年、詩劇『祖霊祭』(第二部・第四部)が『アダム・ミツキエーヴィチ詩集第二巻』としてヴィリニウスで刊行され(日本語訳『祖霊祭 ヴィリニウス篇』2018年未知谷刊)、この二冊の詩集によってポーランドのロマン主義が始まった。

バラードと『祖霊祭』第二部に共通する最大の特徴は、すべてにおいて、民間に伝わる物語や歌謡が素材となっていることである。後者については作者自身、作中の「儀式的歌謡、まじない、呪歌などはほぼ忠実に、時として文字通り、民衆詩から採って来た」と書いている。その「民」とは、ポーランド語ではない言語を母語とする人々だった。バラードも『祖霊祭』も、現在のポーランド共和国領土には含まれない、リトアニア、ベラルーシ、ウクライナにまたがる旧東方領土にリアルな根拠を有するものでありながら、支配者であるポーランド人の言語によって記述された世界なのである。ミツキエーヴィチはワルシャワもクラクフも知らない。

今一つ、バラードと『祖霊祭』に共通する重要な特徴は、生者の世界における死者の記憶の現存、あるいは死者のテキストとの交流だろう。

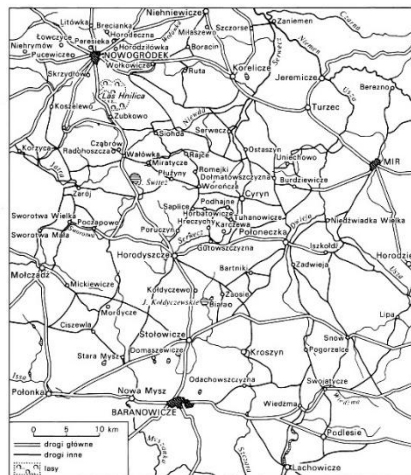
「大亡命」の時代

1830年11月2日、フリデリク・ショパンはワルシャワを立ち、イタリアをめざす旅に出るが、その後

の11月29日、帝政ロシアの支配に叛逆する戦争、「十一月蜂起」(「革命」ではない)がワルシャワで始まる。蜂起は翌年秋に鎮圧され、このことはポーランド人の精神世界に甚大な影響を及ぼし、彼らのロマン主義も変質する。知識人のいわゆる「大亡命」開始(岩波書店刊『ショパン全書簡 パリ時代 下』 p.6

09-627「ポーランド人の《大亡命》とシヨパン」参照)。

変質したロマン主義は、もはや外部からは解読が不能な符牒や修辞に溢れることになる。その変貌の中心には再びミツキエーヴィチの『祖霊祭』第三部があった(1832年パリで出版)。ポーランド独自のロマン主義が生まれた背景に、21世紀の現在から二つの要因を見るとすれば、民族主義(あるいは国民国家の強迫観念)と社会進化論の極大化があったと言える。



Nowogródzka Mickiewicza

マウリツィ・モフナツキ

Maurycy Mochnacki (1803-1834)の言葉～

遂に藝術について書くのはやめるべき時が来た。我々の脳裏に、胸中に今あるのは別のことだ。我々が即興してみせた民族蜂起～これ以上素敵な詩があるだろうか! 我々の生～それ自体がすでに詩だ。武具のざわめき、大砲の唸り声～これからはそれが我々のリズムであり、メロディだ。(…)僕はこの第一巻最後の数頁を、震える手で、胸震わせながら、「11月29日」の数日前に書いていた! 不安な刻限だった。僕の耳には鉄鎖の擦れる音が聞こえていた。胸のうちには(僕にはあまりにもおなじみの)牢獄の哀愁が霧のようにたれこめていった。

1830年12月14日、ワルシャワにて記す (みすず書房刊、関口時正『ポーランドと他者』 p.93)

1863年1月、ワルシャワで「一月蜂起」勃発(～1864秋)。制圧の結果、文化史にいうポズィティヴィズム(pozytywizm)の時代始まる。(せきぐち・ときまさ)

(図出典) Adam Mickiewicz, oprac. S. Makowski, E. Szymanis, Warszawa 1992, p. 92.